

室津半島大星山

丸山周辺の安山岩

冠遺跡・三年山と茶園原遺跡

宇部洪積台地遺跡の安山岩と

冠高原・多久安山岩の比較

2022

防府考古学研究会

目次

はじめに

山口県熊毛郡平生町丸山周辺に分布する安山岩について	1～7
冠高原安山岩・多久安山岩・阿武安山岩の見かけの特徴	8
阿武安山岩	9
冠高原安山岩	10～16
多久安山岩の分類	17
佐賀県多久市 三年山遺跡	18～19
佐賀県多久市 下鶴遺跡	19
佐賀県多久市 茶園原遺跡	19～30
藤尾遺跡の安山岩	31
南方遺跡の安山岩	31～32
幸崎遺跡 3 地区の安山岩	33～34
幸崎遺跡 2 地区の安山岩	34～35
多久安山岩と似たもの	36
長沢池遺跡 B 地区	37～39

三年山・茶園原遺跡の槍先形尖頭器の製作方法

はじめに

この度、沖さんから「山口県熊毛郡平生町丸山周辺に分布する安山岩について」の報告書を防府考古学研究会の本に掲載の依頼があった。丸山産地の安山岩を見つけた下瀬洋一のことを思い出します。この報告書の中にも下瀬への思いと思い出が一杯詰まっていると思います。

丸山が大星山西麓だったことは、最近になって知った。私も平生安山岩を探しに、大星山に何度も登った経験がある。必ず夏の暑い時期に登るので、見つけたいのが半分・暑くて早く帰りたいのが半分である。今に思えば、海に行けば良かった。残念

上記の報告書ではページ不足なので、阿武安山岩・冠高原安山岩・多久安山岩・宇部洪積台地遺跡の安山岩の比較をして掲載することにした。

宇部洪積台地遺跡の安山岩は、風化面の色で見ると大きく分けて二種類である。風化面が茶色の茶色系安山岩と灰色の灰色系安山岩である。この傾向は、どの遺跡を見ても大きく変わることはない。原産地の多久や冠高原の安山岩にも、そのような傾向があります。風化面の発色は、石質が反映されていると思われますが、それを持って多久産だ冠高原産だと言えるものではないことがわかりました。また、縞模様や白い斑晶の多い少ないも多久産・冠高原産を区別する決め手にはなりません参考にはなります。肉眼で区別できるものは、姫島産黒曜石など他にない特徴をもったものにに限られると言うことです。

風化面の色や縞模様や白い斑晶では、多久産・冠高原産の区別はできないことがわかりましたが、風化面の風合いの違いは認められるかもしれません。独特な風合いを言葉で表現することは難しいのですが、表面状態の違いでしょうか、多久産は表面がモヤッとした感じで冠高原産はそれがありません。蛍光灯スタンドの下で、虫メガネをあてて見ると良くわかります。多久安山岩で灰汁（アク）色のものは、その傾向が良く出ています。三年山・茶園原遺跡で槍先形尖頭器などにたくさん利用されていて、多久産安山岩を代表する石材と思われます。その他の、茶色系や灰色系の安山岩にもその傾向はあります。風化や摩滅が進んでいる場合と資料が小さいとわかり難くなりますが、それ以外なら多久産・冠高原産の区別は高い確率で可能と思われます。小城安山岩や飯山産の安山岩など良く知らないものもありますので簡単には言えない所はあります。宇部洪積台地遺跡の安山岩は、多久産と飯山産が推定されています。長沢池遺跡 B 地区の安山岩集積場所のものは、多久産や冠高原産のものではないことは簡単にわかります。宇部洪積台地遺跡の旧石器や石鏃も調べましたが多久産や冠高原産に似たものを一つ探すことさえ簡単ではありません。ただ、資料が小さいものが多いので判定が曖昧になっている可能性はあります。飯山産の可能性は高いと推測されますが、手持ちの資料がないので比べることが出来ないのが残念です。

冠遺跡・三年山遺跡・茶園原遺跡・南方遺跡・幸崎遺跡 2 地区 3 地区の遺物も掲載しています。茶園原遺跡では槍先形尖頭器未製品の初期段階のものもあります。打製石斧も見つけました。長沢池遺跡 B 地区の石核が、石刃石核の可能性があることがわかったことも一歩前進です。そのきっかけになったのが、剥片の洗浄です。昔、拾った遺物は洗浄不足が多いです。良く洗浄すると見え方が変わることもあります。

【備考】「山口県熊毛郡平生町丸山周辺に分布する安山岩について」は沖憲明さんの報告書で
その他は三浦文夫が書いたものである。

茶園原遺跡

槍先形尖頭器

13.2×5.0×1.5 116.5 g

石材 多久安山岩（灰汁色）

モヤッと感が良く出ているもの

縮尺率 80%



山口県熊毛郡平生町丸山周辺に分布する安山岩について（概要報告）

沖 憲明

1 はじめに

瀬戸内海を取り巻く近畿・中国・四国地方には、二上山、金山・五色台、冠などに代表されるサヌカイト・安山岩の大規模な原産地遺跡が展開していることは広く周知されているが、それ以外にも石器石材としての利用実態がよく知られていない安山岩産地が存在する。

本稿で紹介するのは、山口県南東部の室津半島にある、大星山西麓の安山岩についてである。筆者がその存在を知ったのは1988年から参加した山口県旧石器文化研究会実施の宇部台地遺跡群発掘調査において、同研究会員である下瀬洋一氏の教示による。氏は山口県内で打製石器に使用できそうな石材を丹念に探索されており、周防大島等で自身が採集した石材サンプルを見せていただきながら、室津半島や周防大島周辺に平生安山岩と呼ばれる石材が分布している事や、打製石器に使われている例は見たことがないが石質は悪くないので、今後近隣の発掘調査事例が増えればこの石材を用いた石器も見つかるかもしれない、という見解を教わった。

その後、筆者は就職した（財）広島県埋蔵文化財調査センターで広島県西端にある安山岩の原産地遺跡、冠遺跡群の範囲確認調査事業を担当し、事業の終盤に石器石材の流通実態を調べるため関係する石器や原石の蛍光X線分析を行うこととなった。当時、香川県内の遺跡で冠遺跡群の近くに産出する「飯山群」の石器が確認されたことが話題になり、冠遺跡群出土品の中にも他地域産の安山岩が搬入されていた可能性が考えられた。冠遺跡群に近く、分析事例のない安山岩産地はないかと考えた筆者が平生安山岩のことを思い出して下瀬氏に相談したところ、山口県熊毛郡平生町丸山で採集したという原石と、採集場所（以下「丸山産地」という。）の地図の提供を受けた。

当該原石については藁科哲男氏による分析の結果、「平生群」が設定された（藁科2001）が、冠遺跡群に当該産地の石器は確認されず、また下瀬氏から誘いを受けていたにも関わらず筆者が現地を確認しなかったこともあって、原石の採集場所や産状については詳細を公表しないままになっていた。

室津半島やその周囲の島々に産出する安山岩については古くから地形・地質学的あるいは岩石学的な研究成果がある⁽¹⁾が、考古学的には、室津半島の中ほどに位置する岩田遺跡で出土した石鏃（主体は縄文時代晩期）が「遺跡の近くで容易に入手できる安山岩製」と指摘され（潮見1978）、竹広文明氏によってその産地が皇座山西側山麓である可能性が示唆されている（竹広2013）程度で、長らく詳細な研究対象とされてこなかった。丸山産地の分析成果公表後も、室津半島南側の長島に位置する田ノ浦遺跡で出土した縄文時代後～晩期を主体とする安山岩製石器（（財）山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2007・2011）について蛍光X線分析が行われた結果、一部が田ノ浦遺跡と同じ長島や、長島の南にある八島で産出する石材と一致するとされ（石井2009a）、原石の産状が石井龍彦氏により紹介された（石井2009b）。竹広文明氏も両島並びに周防大島、室津半島南部の皇座山の現地踏査を行っている（竹広前掲）が、それら考古学関係者による調査は「丸山産地」を含む室津半島北部には及んでおらず、この間、情報提供者である下瀬氏も亡くなられた。氏が把握していた情報の詳細を確かめなかったことはひとえに筆者の怠惰によるものであり、本稿をまとめることで下瀬氏から託された情報の一端を公開する責を果たしたい。防府考古学会三浦文夫氏には本稿掲載の機会をいただき、心より感謝申し上げる次第である。

2 既存資料の整理と現地踏査

(1) 「丸山産地」周辺の地形・地質概要

「丸山産地」を含む室津半島北部では、古生代ないし中生代に形成された花崗閃緑岩などの深成岩や珪質片岩などの変成岩で構成される基盤を突き抜けて、大星山や鳩ヶ峰の山頂にあたる場所で新生代にマグマが噴出し、瀬戸内火山岩類と総称される安山岩等が生成したとされる。現在、室津半島北部の瀬戸内火山岩類は、大星山や鳩ヶ峰の頂上部では基盤の上層に残り、周囲の山腹斜面は浸食され基盤が露出しているとされる（岡村 1975, 網永 1978, 日本の地質『中国地方』編集委員会（編）1987, 産業技術総合研究所地質調査総合センター2022 など）。室津半島の瀬戸内火山岩類の生成時期は新生代新第三紀中新世の後期ランギアン期～トートニアン期（15.3～7.246Ma）とされ（産業技術総合研究所地質調査総合センター前掲, 他に、巽ほか 1980 により皇座山山頂採集石材の K-Ar 年代測定が行われ、 12.6 ± 0.6 Ma の測定値が示されている。）、複数の時期に細分する所見も示されている（鷹村 1973, 網永前掲, 白木・杉本 1989, 白木・副島 1989, 白木・大田・熊本 1989）。

大星山の山腹斜面は前述の通り、基盤である深成岩や変成岩が広く分布するが、山頂直下から西方向の名切地区を経て「丸山産地」付近に至る東西約 2 km, 南北 300m 前後の帯状の範囲に、第四紀後期チバニアン期～完新世（下限年代 0.4Ma）に形成された地すべり堆積物が分布するとされ（産業技術総合研究所地質調査総合センター前掲）、地形図でも特に傾斜の緩やかな斜面として認めることができる。この地すべり堆積物の範囲については、「地すべり地形分布図」（国立研究開発法人防災科学技術研究所 2022）に更に詳細な記載があり、大星山山頂に近い東側（標高概ね 90m 付近以上の範囲）が、地すべり移動体の輪郭が明瞭な範囲と図示されている。現地踏査にあたっては、この地すべり地形の範囲を中心に、瀬戸内火山岩類の分布域から離れている「丸山産地」やその周囲における安山岩の有無や産状を観察することとした。

(2) 踏査の概要

現地踏査は 2022 年に、2 回に分けて行った。第 1 回踏査は「丸山産地」を中心に、西は約 1 km 離れた神花山から、東は約 2 km 離れた佐賀地区の荒木川⁽²⁾ 河口に至る標高 50m 以下の沿岸部を対象とした。第 2 回踏査は「丸山産地」を再訪しより詳細に観察するとともに、田名山地北側の畑地区から荒木川の河口から約 1 km 川上付近に至る、標高 150m 前後までの山麓を対象とした。

現地では、崖などの土層断面や河床・沢の転石を観察したほか、近隣で採集された石材が利用されていると予想される石垣・石積なども石材組成が反映されている可能性が高いと考え、観察対象とした。

3 まとめ—丸山産地の安山岩産状について

(1) 調査成果の総括（第 1 図）

現地や採集した原石の観察所見の詳細については別稿を準備中のため、ここでは概要を列挙したい。地質図に示された地すべり堆積物の範囲はなだらかな傾斜の台地状の地形（以下、記述簡略化のため「台地」と仮称する。）で、「丸山産地」はその先端部にあたる。「丸山産地」から離れた台地の東部、概ね標高 80m 以上の範囲（平生町有形民俗文化財「佐賀の夫婦松」付近以東）では、台地上に大量の安山岩礫が堆積していた。安山岩礫の分布範囲は「地すべり地形分布図」に示された移動体範囲とほぼ一致しており、大星山山頂に分布する瀬戸内火山岩類が大きく層序を乱さず滑落してきた可能性が考えられる。「丸山産地」を含む台地西部では一辺 40 cm 程度までの大きな安山岩礫が石垣等に多く用いられていたが、台地上に礫の自然堆積層は確認できなかった。台地上に礫層が認められなかった原因は後世の地形改変とも考えられるが、台地の北～西側を流れる川には同様の大きさの安山岩礫が普通に認められることか

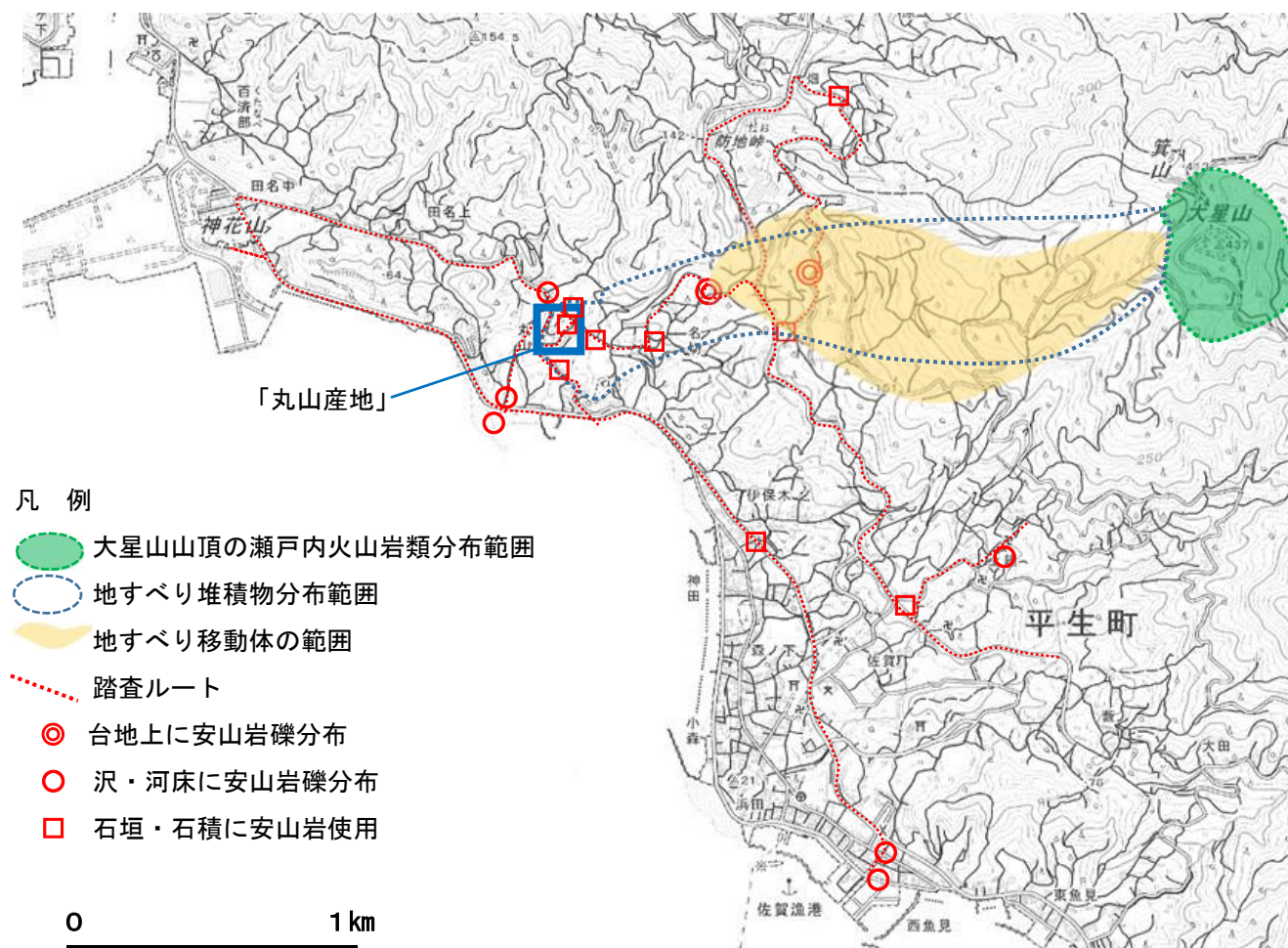
ら、石垣等に使用された石材の相当部分が台地下の河床等で採集された転石であったと考えられる。

その他の範囲でも、大星山山頂の瀬戸内火山岩類分布域直下から流下する沢や河川の河床、それらの沢等に近接する石垣には安山岩が認められた一方、大星山と河川水系が分かれている田名山地～百済部海岸低地では安山岩が認められなかった。前述の地すべり移動体の範囲以外では、大星山山頂から現在の沢や河川を流下した礫があったにとどまると推測される。

安山岩の石質は、「丸山産地」を含む大星山西側では節理のやや発達した硬いもので、打製石器の材料としては使いにくい印象をもった。一方、より南側の佐賀地区採集のものは節理の発達が弱く、割れを比較的コントロールしやすい。

(2) 課題と展望

「丸山産地」やその周辺の大星山西麓には、地すべりや河川の運搬作用の及ぶ範囲で安山岩の転礫が分布することが判明した。今回踏査を行わなかった大星山北～東麓や、大星山と同様に山頂に安山岩が分布する鳩ヶ峰の山麓にも河床を中心に安山岩の転礫が分布する可能性がある。



第1図 大星山西麓の安山岩分布状況等（1：25,000）

国土交通省国土地理院 1:25,000 地形図「水場」図幅を使用。「大星山山頂の瀬戸内火山岩類分布範囲」「地すべり堆積物分布範囲」は「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」（国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 2022）から、「地すべり移動体の範囲」は「地すべり地形分布図WMS サービス」（国立研究開発法人防災科学技術研究所 2022）から、それぞれ筆者が転記。

室津半島南部や島嶼部における地質学的調査の成果（白木・杉本前掲，白木・副島前掲，白木・大田・熊本前掲）を見ても瀬戸内火山岩類の産状は多様であるが，考古学・埋蔵文化財関係者による原石の採集地情報や蛍光X線分析データは十分に対応しておらず，田ノ浦遺跡で産地不明と判定された遺物についても本地域の未確認産地のものの可能性は十分に残っている。瀬戸内火山岩類の全域について考古学的検討に適用できる精度で石材の分布範囲や産状を把握し，理化学的方法も併用して出土遺物の原産地特定を体系的に進めていくことが望まれる。

註

- (1) 山口県室津半島周辺の安山岩に関する岩石学的研究史については，竹広文明氏がまとめている（竹広 2013）。
- (2) 国土地理院地形図に掲載されていない河川や山地等の地形名称については，現地踏査時に確認した標識類，あるいは『平生町史』（網永 1978）の表記による。

文献

- 網永 肇 1978「序章 第一節 2 地形と地質 3 地形各説 4 地形の発達」後藤陽一（監修）『平生町史』平生町役場，pp. 6-29
- 石井龍彦 2009a「山口地域の打製石器石材利用の様相」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』中四国縄文研究会 20 周年記念大会・第 2 回西日本縄文文化研究会合同大会，pp. 155-176
- 石井龍彦 2009b「西部瀬戸内地域の石器石材利用の様相」『月刊考古学ジャーナル』No. 594，pp. 13-16
- 岡村義彦 1975「Ⅱ 古生界 B 領家変成岩類」『山口県の地質』山口県立山口博物館，pp. 28-29
- 国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 2022「20 万分の 1 日本シームレス地質図 V2」
<https://gbank.gsj.jp/seamless/v2.html>（閲覧日：2022 年 6 月 14 日）
- 国立研究開発法人防災科学技術研究所 2022「地すべり地形分布図WMSサービス」（閲覧日 2022 年 6 月 14 日）
- 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2007『田ノ浦遺跡－平成 17・18 年度調査－』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
- 財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター2011『田ノ浦遺跡Ⅱ－平成 20・21 年度調査－』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第 59 集
- 潮見 浩 1978「第一章 第一節 先土器時代・縄文時代 第二節 弥生時代」後藤陽一（監修）『平生町史』平生町役場，pp. 50-113
- 白木敬一・杉本 章 1989「山口県八島・祝島の火山岩」白木敬一（編）『日本の高マグネシア安山岩』1986-88 年度文部省科学研究費補助金総合研究（A）（課題番号 61302027）「島弧における高マグネシア安山岩の地質学的岩石学的研究」研究成果報告書，pp. 75-89
- 白木敬一・副島浩一 1989「山口県平郡島および室津半島の火山岩」白木敬一（編）前掲図書，pp. 91-105
- 白木敬一・大田真一郎・熊本和子 1989「山口県周防大島の高マグネシア安山岩」白木敬一（編）前掲図書，pp. 107-117
- 鷹村 権 1973「山口県大島附近の第三紀火山岩類」『岩石鉱物鉱床学会誌』68，pp. 329-340
- 竹広文明 2013「瀬戸内のサヌカイト・安山岩産出地をめぐって」『内海文化研究紀要』第 41 号 広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設，pp. 1-14
- 巽 好幸ほか 1980「大阪周辺及び山口県東部に分布する瀬戸内火山岩類の K-Ar 年代」『岩石鉱物鉱床学会誌』75，pp. 102-104
- 日本の地質『中国地方』編集委員会（編）1987『日本の地質 7 中国地方』共立出版
- 藁科哲男 2001「冠遺跡群出土遺物の原産地分析」『冠遺跡群』Ⅷ 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター，pp. 179-195



大星山西麓の安山岩産状

- a・b 「丸山海浜パーク」西側河口 安山岩分布状況
- c 同地点採集安山岩
- d・e 「丸山産地」中心部の安山岩石垣
- f・g 名切地区 平生町指定有形民俗文化財「佐賀の夫婦松」付近 安山岩分布状況
- h 同地点採集安山岩
- i 名切地区 標高 110m付近 安山岩分布状況
- j 同地点採集安山岩



大星山南麓の安山岩産状

a・b 佐賀地区 標高 100m 付近の安山岩石垣

c 佐賀地区標高 80m 付近採集安山岩

d・e 佐賀地区 荒木川河口安山岩分布状況

f 左：伊保木地区県道 23 号線脇採集安山岩，右：佐賀地区 荒木川河口採集安山岩



g 名切地区採集安山岩
(左上石片の横幅約 7 cm)

h 佐賀地区採集安山岩
(上の石片の横幅約 5 cm)

付記―「丸山産地」とは何だったのか

資料調査と踏査の結果、「丸山産地」は大星山の西麓に広がる安山岩産地の一部と理解したが、筆者にはどうにも釈然としなかった。下瀬氏は沢をしらみつぶしに踏査し丹念な現地観察を行ってきた方であり、今回筆者が歩いた範囲も全て歩いて、安山岩が広範囲に分布するのを知っていたはずである。なのに何故、「丸山産地」だけを筆者に知らせてきたのか。第2回の踏査を一通り終えた後も疑問は消えず、帰りに回り道をして再度「丸山産地」に足を向けた。

それまで踏査では南～西側から斜面を登り、「丸山産地」北端を通過していたが、反対の北東側から近付くと、「丸山産地」が海に向けて伸びる台地の末端部にあることがよく分かった。「丸山産地」の真中を通る道も発見し、地形をより詳細に観察することもできた。「丸山産地」は数軒の家屋と水田や畑が広がる台地上の平坦な土地で、台地の向こうは比高差10～20mほどの崖、その下はこじんまりとした沖積地が広がり、さらにその先は砂浜を経て海に至る。昔、下瀬さんと歩きながら遺跡の立地を教わった宇部台地の地形を思い出した。

下瀬さんは、単なる石材原産地としてでなく、原産地遺跡の可能性のある場所としてこの場所を教えたのではないかと筆者にはそのように思えてきたが、答えを確かめることはできない。

下瀬さんは、20年もかかってやっと分かったか、さあ、石器は探しに行かないのか？とニヤリと笑うだろうか、それとも、違うよ、勉強が足りんなあ、普通の大工のワシに分かる事が何で分からないのか、といったものように苦笑するだろうか。ごめんね下瀬さん、まだ分からんわ、と謝りつつ筆を擱くこととする。



名切地区から南を望む。画面右端の木立の向こうが「丸山産地」



名切地区から南西方向を望む。画面左の水田・宅地付近が「丸山産地」。画面左端にわずかに海が見える。

冠高原安山岩・多久安山岩・阿武安山岩の見かけの特徴

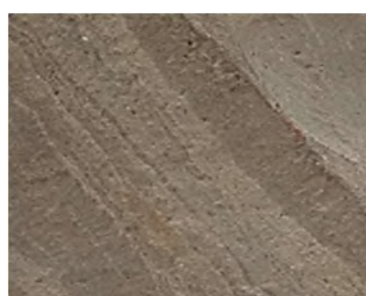
安山岩の名称	場所	白い斑晶
冠高原安山岩	スキー場丘陵頂上	ラジコン飛行場丘陵ほど多いものはないが、確認はできる。
	ラジコン飛行場丘陵	簡単にわかるものもあるが、少ないものもある。
多久安山岩	多久市三年山・茶園原	大体少ないが、たくさんあるものもある。
阿武安山岩	阿武町福田下西台	多い。ラジコン飛行場丘陵より粒が大きい。

安山岩の名称	場所	縞模様
冠高原安山岩	スキー場丘陵頂上	縞模様の強いもの、弱いもの、その中間のものがある。
	ラジコン飛行場丘陵	縞模様の弱いもの、良くわからないものがある。
多久安山岩	多久市三年山・茶園原	縞模様の認められるものがわずかある。
阿武安山岩	阿武町福田下西台	資料が少ないので保留

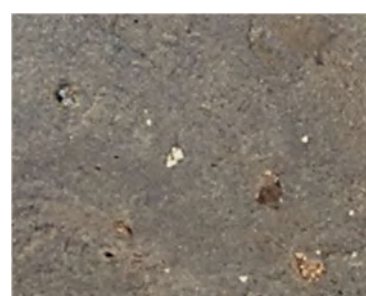
安山岩の名称	場所	表面（風化面）
冠高原安山岩	スキー場丘陵頂上	灰色系安山岩
	ラジコン飛行場丘陵	灰色系安山岩
多久安山岩	多久市三年山・茶園原	灰色系安山岩と茶色系安山岩と灰汁色安山岩がある。
阿武安山岩	阿武町福田下西台	資料が少ないので保留



冠高原スキー場



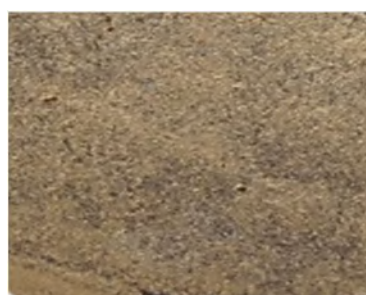
冠高原スキー場 縞模様



冠高原ラジコン飛行場



阿武安山岩



多久茶色系安山岩



多久安山岩（灰汁色）

阿武安山岩

山口県阿武郡阿武町福田下西台で採集したものである。福賀森遺跡は東台にあるが、その西側にある溶岩台地である。台地の端に、たくさんの安山岩を含む溶岩が 1 箇所集められた場所があり、その中から石器に加工できそうな石を選んで持ち帰ったものである。

この場所は下瀬からの情報であり、剥片も採集されている。

この安山岩の風化面には、白い斑晶と多くの陥没が見られる。

福賀森遺跡で採集された、玄武岩製の石器や剥片には夾雑物の抜け落ちた痕跡が多く認められるとあるので、阿武安山岩の可能性もあると考えられる。

拡大 新しい割れに 2 ミリ位の白い斑晶が見える



9.2×6.8×5.0 346 g 縮尺率 60%



割れは、新しいので実際は 2 倍から 3 倍の大きさがあつたものと思われる。

これ程大きなものは、宇部洪積台地の遺跡では珍しい。

この安山岩の原石には、白い斑晶が阿武安山岩に負けない位認められるが、他の剥片にはない。

宇部市東岐波 一本松遺跡 6.6×4.0×2.9 64.5 g

冠高原安山岩 広島県廿日市吉和伴蔵

スキー場の灰色系安山岩

縞模様が特徴的である。ラジコン飛行場に比べ風化が進んでいる影響で完全に変色している。
白い斑晶は、ラジコン飛行場に比べ少ないものが多い。



帯状の縞模様



薄っすらとした縞模様



7.3×7.7×1.0 38.5 g 縞模様
縮尺率 70%



はっきりとした縞模様
白い斑晶もかなりある

ラジコン飛行場の灰色系安山岩

白い斑晶が目立つものと、少ないものがある。

風化面は白く見えるが、風化の影響が少ないので内面の黒色を残している。



少ないもの



白い斑晶が目立つ



冠高原スキー場

ナイフ形石器

11.0×4.2×1.3 54.0 g

灰色系安山岩

縮尺率 70%

横剥ぎ剥片を利用した二側縁加工のナイフ形石器である。

背面の調整剥離は丁寧で、刃部側は緩やかな浅い剥離で調整している。

刃部に使用した痕跡がないので先端部の古い割れがヒントになるかも知れない。縞模様が薄っすら見えて、白い斑晶が少しある。



冠高原スキー場

ナイフ形石器

6.7×3.1×1.0 27.0 g

灰色系安山岩

横剥ぎ剥片を利用した一側縁加工のナイフ形石器である。

背部の加工は丁寧であるが、先端の部分に加工がない。

刃部に使用痕が認められる。

基部は、新しい割れである。

白い斑晶がかなり認められるが、縞模様は、はっきりしない。



冠高原スキー場

ナイフ形石器

6.5×3.2×0.8 19.0 g

灰色系安山岩

横長の剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。

背部の加工は、丁寧である。

薄っすらとした縞模様があり、白い斑晶がわずかに認められる。



冠高原スキー場

ナイフ形石器か石錐

6.4×3.1×1.0 18.5 g

灰色系安山岩

横剥ぎ剥片を素材とした

部分加工のナイフ形石器と

思われるが、先端が鋭く尖るので、
石錐の可能性もある。

白い斑晶がわずかに認められる。



冠高原スキー場

横剥ぎ剥片

6.2×16.7×1.6 204.0 g

灰色系安山岩

縮尺率 45%

翼状剥片に似た調整が一部認められる。

縞模様と白い斑晶が認められる。



冠高原スキー場

横剥ぎ剥片

7.5×10.9×1.5 153.5 g

灰色系安山岩 縮尺率 60%

薄っすらとした縞模様と白い斑晶がわずかに認められる。



冠高原スキー場

横剥ぎ剥片

7.5×11.3×1.5 127.0 g

灰色系安山岩 縮尺率 60%

はっきりとした縞模様と白い斑晶が認められる。



冠高原スキー場

ナイフ形石器

4.6×3.1×0.8 12.5 g

灰色系安山岩

上半部の欠損は新しいものです。

現存が、基部か先端部か

判断できない。

横剥ぎ剥片を素材としている。

剥離は、階段状で加工はやや粗い。

縞模様がある。

大きさの推定は、7～8 cm位あり

大型のタイプである。



冠高原スキー場

両面加工の石器

6.0×5.2×1.9 47.5 g

灰色系安山岩

槍先形尖頭器の可能性はある。

捕獲岩片や強い縞模様の影響で、

内部亀裂が見られる。

下半部の欠損も、亀裂の影響とも

考えられる。



冠高原スキー場リフト下

スクレパー

6.2×9.1×1.7 78.5 g

茶色系安山岩 縮尺率 70%

左端から正面中央稜線まで調整加工がある。



冠高原ラジコン飛行場

スクレパー

8.9×4.3×1.2 45.0 g

灰色系安山岩 縮尺率 80%

調整剥離が、正面と裏面にある。

白い斑晶が、かなり認められる。

15 地点の隣の丘陵で、その間を

谷川が流れている。丘陵の下に

6b 地点がある。丘陵に上がると

すぐにあり散在は狭い。冠遺跡の

報告書には石器分布地点の記載はない。

緯度 34.432594

経度 132.079262 付近



冠高原ラジコン飛行場

槍先形尖頭器

8.0×4.7×1.8 64.0 g

灰色系安山岩 縮尺率 90%

表面右半面の剥離は、打撃の力が
抜けきらず階段状になっている。

槍先形尖頭器では、珍しいことでは
ありません。

白い斑晶が、かなり認められる。



冠高原ラジコン飛行場

剥片

6.9×4.1×1.2 36.0 g

灰色系安山岩

縞模様が薄っすら認められる。

白い斑晶が、かなり認められる。



冠高原ラジコン飛行場

剥片

8.2×4.3×2.0 56.0 g

灰色系安山岩 縮尺率 90%

白い斑晶が、わずかに認められる。



冠高原 その他

剥片

6.5×2.8×0.8 18.0 g

茶色系安山岩

かなり風化している。



冠高原 その他

縦長剥片

4.9×3.2×0.5 9.5 g

灰色系安山岩

6b 地点から少し離れた場所で採集したものである。開発途中の道路の切通しで発見したのですが、他に遺物は見当たらなかった。

縞模様と白い斑晶がわずかに認められる。



冠高原 その他

剥片

6.3×3.6×1.2 26.0 g

灰色系安山岩

縦線が無数見える石材である。

新しい割れに光沢がある



冠高原その他

剥片

7.0×3.1×1.6 25.0 g

灰色系安山岩

極端に風化した例



冠高原その他

横剥ぎ剥片

2.1×4.8×0.7 8.0 g

安山岩

極端に風化した例



多久安山岩の分類

多久安山岩の風化面の色で分類すると、灰色系安山岩と茶色系安山岩が存在する。その他に、灰汁色のものもある。

灰汁色をした多久安山岩で表面がモヤッとした感じである。

風化が進むと③の姫島産ガラス質安山岩に似た風合いになる。



茶色系安山岩

灰色系安山岩



表面がモヤッとした感じは灰汁色に比べわかり難いが茶色灰色系にも認められる。

佐賀県多久市多久本町西ヶ原 三年山遺跡

昭和 44 年当時・三年山遺跡は山林で石器を採集できる場所はほとんどありませんでした。山林の赤土が浅く掘り返えされ露出した場所で①②を採集した。他に、1 点完形の柳葉形槍先形尖頭器があったと思われますが確認できません。丘陵の端で④⑤を採集した。③は、その中間地点である。

①三年山遺跡

槍先形尖頭器

9.1×3.7×1.5 52.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 70%

先端部は、欠損しているが
全体的に少し曲がりがある。

加工は、丁寧である。



②三年山遺跡

槍先形尖頭器の未製品

11.4×5.0×2.0 110.0 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 60%

縞模様がある。

粗割りりで、大まかな祖型が
出来た段階である。



③三年山遺跡

槍先形尖頭器

8.0×5.0×1.1 55.5 g

石材 安山岩

縮尺率 80%

灰色系安山岩で風化が進んだ
もの。幅広のわりには薄くて、
丁寧な加工である。



④三年山遺跡

スクレパー

3.1×4.0×0.7 9.0 g

石材 安山岩（灰汁色）

④⑤は、同じ場所で採集したのですが何の石器か、どの時代のものか良くわからないものです。



⑤三年山遺跡

石鏃

3.4×2.2×0.3 2.5 g

石材 黒曜石

下部が欠損しているので、もう少し大きなものであったと思われます。このような剥片鏃で、大きなものは弥生時代にあります。



佐賀県多久市 下鶴遺跡

下鶴遺跡

角錐状石器

長さ 13.6 c m

石材 安山岩

縮尺率 50%

小野田市歴史民俗資料館

第 14 回特別企画展「石器展」

パンフレット掲載の写真を元に

背景を除去したものです。

河野豊彦 採集

3 面加工 裏面は先端に向かって反り上がっている。



モノクロ写真からの加工

佐賀県多久市多久本町西ヶ原 茶園原遺跡

茶園原遺跡

槍先形尖頭器

4.0×2.6×0.8 7.5 g

石材 安山岩（灰汁色）



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

7.5×3.8×1.1 35.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

基部の表裏に素材面を多く
残している。

その部分は、厚みが薄いので
臨機応変に浅い剥離で対応して
いる。



茶園原遺跡

ナイフ形石器

10.3×3.9×1.2 40.0 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 70%

二側縁加工の切り出し型の
ナイフ形石器である。

横剥ぎ剥片を素材としている。

背面の加工は粗く、刃部側の加工は
緩やかで浅い調整剥離で整形している。
刃部には、細かい使用痕が認められる。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

8.2×4.3×1.2 51.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 80%

先端部は、欠損している。
左側縁上部は、階段状剥離に
なっているが、基部の加工は
丁寧である。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器かスクレパー

5.5×4.5×1.3 29.0 g

石材 安山岩（灰汁色）

石材には、薄っすらと縞模様が見える。

最先端部は、原石面を残して

通常は尖らすはずの加工を省略している。

加工は、丁寧な押圧剥離で調整されている。

先端部は、簡単に尖らすことができるはず

なのに加工をしなかった理由は、

槍先形尖頭器ではないからだと思われます。

下半部の欠損には明瞭な痕跡が認められる。

尖ったものが稜上中央に左斜め方向からあたり

その衝撃力が抜けた位置が裏面に残されています。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

18.5×8.1×4.9 620.0 g

石材 茶色系安山岩

縮尺率 50%

扁平な原石を粗割りして

槍先形尖頭器にするタイプ

と思われます。このタイプは、

厚みがあるので斧形石器に

転用が可能です。

これが、槍先形尖頭器の未製品

と思ったのは、先端部が尖って

いる不思議です。他に、もう一点

これより扁平ですが大きなものが

あります。やはり尖っています。

石核なら尖らす必要がないと思われます。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

6.0×3.6×1.2 26.5 g

石材 灰色系安山岩

槍先形尖頭器は、槍や尖頭器の
突くイメージを象徴した名称
であるが、側縁はナイフ形石器や
スクレパーより良く切れる刃部を
持っているのである。柄の付いた
槍先を取り外せるようにすれば、
ナイフやスクレパーや刀としても
利用できるのでは、あえてナイフや
スクレパーは必要ないかもしれません。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

5.9×3.2×1.0 19.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

三年山・茶園原遺跡では、
たくさん槍先形尖頭器が
発見されているが、未製品や
欠損したものが多く完形品は
少ない。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

13.2×5.0×1.5 116.5 g

長さの推定 17～18 cm

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 60%

縮尺すると表面の感じがわかり
難いのが残念です。



茶園原遺跡

剥片

12.1×6.0×2.0 144.0 g

石材 茶色系安山岩

縮尺率 60%

ナイフ形石器やスクレパーなどを作る
素材剥片である。

槍先形尖頭器も作れます。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

13.0×6.0×1.9 146.0 g

石材 灰色系安山

縮尺率 60%

粗割りの加工が施された初期段階の
ものと思われます。

粗割り加工をするか否かは、
その素材の状態に応じて
臨機応変に決定されたものと
思われる。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

14.7×5.3×1.8 168.5 g

石材 灰色系安山岩

縮尺率 50%

両面の粗割りが終わった段階の
ものである。

末端部の剥離の厚みが、急激に
減少しているので、この程度の
長さである。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

4.9×2.5×0.9 14.5 g

石材 安山岩

茶園原遺跡では、小さい部類であるが
推定で7cm位あり中型のものである。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

12.3×6.2×1.5 142.0 g

石材 安山岩

縮尺率 60%

大きく欠損している場合は、
僅かな角度の違いで左右非対称に
見える場合があるので見方が大切である。
この程度加工してあれば、完成品と
言えなくはないが判断で悩む所である。
中細形木葉形のタイプが推測される。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

11.7×6.2×2.2 131.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 60%

角錐状石器は、突く機能が
主であるが槍先形尖頭器は
スクレパーやナイフの機能も
あることが相違点である。



茶園原遺跡

ノッチ

7.6×3.6×1.2 38.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

右側縁に加工がある。

石材のモヤッとした感じが
良くでている。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

4.3×3.3×1.3 19.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

幅に対して厚みの割合が高い
タイプである。

表裏面の中央を厚くしている。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

5.9×4.6×1.5 37.5 g

石材 安山岩（灰汁色）



茶園原遺跡

槍先形スクレパー

18.2×4.0×1.7 158.0 g

石材 安山岩

縮尺率 45%

縞模様がある。

表面先端部は原石面を残している。

先端部を尖らすような加工はない。

形が鎌の刃に似たスクレパーである。

末端部は、欠損している。

曲がっているだけなら、用途の違う

槍先形尖頭器として範囲に含める

ことも考えられるが、先端部に原石面を

残して尖らす加工がないのは疑問である。



茶園原遺跡

槍先形スクレパー

11.3×4.8×1.7 98.0 g

石材 茶色系安山岩

縮尺率 70%

表裏先端部と裏面の一部に

調整加工が認められない。

このような、鎌状の形をもつ

ものは槍の機能は考え難い。

槍先形尖頭器の未製品でも

左右のバランスはとれている

ものが多い。



茶園原遺跡

槍先形スクレパー

7.9×4.5×1.9 68.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 80%

石鎌に似たスクレパーと思われます。

槍先形尖頭器の未製品が多い

遺跡ですが、このように曲がった

もの作することは技術的に考えられ

ません。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

6.0×3.1×1.1 17.0 g

石材 安山岩

基部に向かい跳ね上がる
ような湾曲が見られるが、
表裏を逆にすると思った
ほどではない。

加工は、粗い方ではない。



茶園原遺跡

スクレパー

5.0×11.8×1.7 125.5 g

石材 安山岩

縮尺率 65%

横剥ぎ剥片を素材としている。横剥ぎ剥離の連続性がうかがわれる。

刃部の加工は、正面と裏面にあるが整然とした剥離ではない。



茶園原遺跡

石核

5.0×8.0×2.0 115.0 g

石材 安山岩

縮尺率 70%

小型の剥片を取る

石核である。



茶園原遺跡

打製石斧

14.7×6.4×1.5 182.0 g

石材 安山岩

縮尺率 60%

上端部に素材面がわずかに残っているので、これより長いものではない。

上半部は、正面左右側縁にインパクトのある大きな階段状剥離があるのみで、ほとんどが素材面である。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器？

6.7×3.5×1.1 31.0 g

石材 安山岩

石材の摩耗から打製石斧と同じ場所のものと思われます。

石槍の可能性もあります。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品？

8.7×4.0×1.3 52.0 g

石材 安山岩

縮尺率 80%

この未製品も上記と同じようなことが言えます。

三年山や茶園原遺跡も他の時代の複合遺跡と考えられますのですべてが、槍先形尖頭器と考えるのは不自然です。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器の未製品

12.0×6.7×1.3 190.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 60%

剥離角は緩やかで、深い調整剥離が両面に行われている。左側縁の剥離が右側縁近くまで延びている所もある。先端部は欠損している。基部の整形が行われていない。



茶園原遺跡

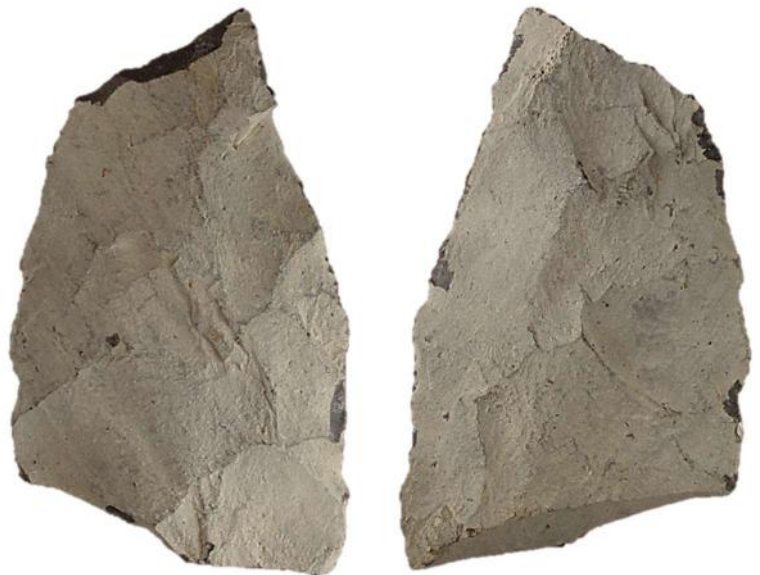
槍先形尖頭器の未製品

10.6×6.3×2.0 146.5 g

石材 安山岩（灰汁色）

縮尺率 70%

この程度、加工が進んでいると完成品との判断が難しい所である。推定の長さは18cm位と考えられるので、完成品なら中細形木葉形のタイプである。しかし、三年山や茶園原の槍先形尖頭器の完成品の作りはかなり精巧で、このような粗い作りではない。



茶園原遺跡

石核

12.3×7.5×3.3 271.0 g

石材 安山岩

縮尺率 60%

灰色系安山岩であるが、青みがある。風化面の色でも細かく見ると4～5種類ある。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

7.7×4.3×1.0 46.0 g

石材 安山岩（灰汁色）

割れていたのを、ご飯糊で接着した。
隙間が少しあっても糊で埋めることができるのが良い。きれいに接着するには、つけ過ぎず適量が大切である。

階段状剥離になっている部分があるが、
打撃の力が上手く抜けきらなかった
だけである。強いて言えば、失敗であるが
やり直しができないのが石器作りの世界である。
ピンポイントにある階段状剥離が、芸術的に
見えてならない。



茶園原遺跡

槍先形尖頭器

7.9×5.0×1.6 59.0 g

石材 灰色系安山岩

裏面先端部に原石面を大きく
残している。

基部は欠損しているが、幅広なので
中細形木葉形のタイプと推測される。
柳葉形のタイプが多いので珍しい。
一部に鋸刃状の剥離が見られるが、
故意のものはわからない。



茶園原遺跡

槍先形スクレパー

5.1×3.7×1.3 28.5 g

石材 灰色系安山岩

先端部は欠損しているが、
鎌の刃のように曲がるタイプの
両面加工石器である。

槍先形尖頭器に似ているが尖頭器と
しての機能はないと思われます。



藤尾遺跡の安山岩 山口県山口市深溝藤尾原

茶色系安山岩であるが①②は風化がすすんでいる。



①4.3×1.1×1.4



②4.0×1.6×1.0



③3.8×1.5×0.8



④5.2×3.2×1.1



⑤2.5×1.4×0.3



⑥2.4×1.3×0.5



⑦2.2×1.6×0.5



⑧1.8×1.1×0.5

南方遺跡の安山岩 山口県宇部市西岐波山村上ノ山

茶色系安山岩



6.7×2.6×1.4



4.4×1.7×0.9



4.2×1.5×1.0



3.6×1.5×0.8



3.2×1.8×0.9



2.2×2.4×1.2



2.0×1.9×0.9

灰色系安山岩

南方遺跡



3.5×1.8×0.8



3.0×1.7×0.5



2.1×1.1×0.5



2.1×1.3×0.3



1.9×1.6×0.6

白い斑晶のあるもの



2.8×1.5×0.9



拡大

縞模様のあるもの



3.3×1.1×1.0



3.2×2.1×0.8

風化の進んでいるもの



4.6×1.7×1.4



2.8×2.1×0.5



3.2×1.6×1.3

幸崎遺跡 3 地区の安山岩 山口県山口市秋穂二島南

茶色系安山岩で風化が進んでいるもの



4.1×1.9×0.9

茶色系安山岩



3.4×1.3×0.9



3.1×1.3×0.6



4.5×2.2×0.5



3.2×1.4×0.9



2.9×1.4×0.7



2.0×1.3×0.4

茶色系安山岩で筋が見られるもの



4.9×2.3×0.9



5.3×3.3×1.2 白い斑晶あり



4.1×1.9×0.7



3.9×1.8×0.9



2.4×4.0×0.6



3.0×1.7×0.6



2.1×1.3×0.3



1.5×1.6×0.3



1.4×2.0×0.5

幸崎遺跡 2 地区の安山岩 山口県山口市秋穂二島南

風化が進み過ぎて判断できないもの



7.2×2.9×1.5



6.0×2.8×1.1



2.7×2.5×0.8



2.3×3.7×0.6

茶色系安山岩



5.0×2.6×1.3



2.3×2.2×0.5



2.8×2.2×0.7



2.8×1.3×0.4

灰色系安山岩



4.7×2.3×0.6



3.7×4.6×1.3



4.7×4.1×1.2



3.3×2.7×1.0



2.4×3.8×0.6



3.5×1.5×0.8

多久安山岩で灰汁色したものは三年山・茶園原遺跡で、槍先形尖頭器などにたくさん利用されています。宇部洪積台地の遺跡に存在するのか。

南方遺跡では、剥片 800 点中 4 点認められたが同一のものかはわかりません。

もし存在しても極めて少ないものである。

南方・長桝・岩上・藤尾・幸崎遺跡 3 地区の石鏃では認められなかった。

今の所、宇部洪積台地の旧石器でも認められない。

南方遺跡



2.1×2.0×0.3



2.1×1.6×0.3



1.5×2.5×0.3

拡大して比較



多久安山岩（灰汁色）

多久安山岩に似たものがあるが非常に少ない石材である。



南方遺跡 1.8×1.4×0.3



幸崎遺跡 3 地区 2.2×1.6×0.3

拡大して比較して見る



多久安山岩

長沢池遺跡B地区（安山岩集積場所） 山口県山口市鑄銭司今宿長沢池

石刃石核

以前は、石核で報告されていたが石刃石核の可能性があります。最後の剥離が正面中央で、その前の剥離が正面右側である。どちらも、打撃の力が底まで抜けずに蝶番剥離になっている。最後の打撃による亀裂の痕跡が右側剥離面の三分の一まで延びています。打面調整も認められる。宇部洪積台地では、このサイズの石刃石核は発見されていないので非常に貴重な資料になります。

安山岩の石材のサイズだけ見ても本地域では大きな方ですが、山陽小野田市の大谷遺跡の盤状石核は、12×8cm位あります。



9.0×5.8×3.6 242 g

灰色系安山岩

縮尺率 80%

亀裂部分の拡大

長沢池遺跡 B 地区

安山岩の原石・石核・剥片など 30 点 1906 g が一ヶ所で発見された。石刃石核 1 点・原石 4 点・原石面が半分位ある剥片が 6 点・一部が原石面の剥片が 18 点・剥片が 1 点である。原石面があるものがほとんどで、原産地の原石を分割した剥片である。原石より、原石分割剥片のウエイトが大きい。原石礫の形状は、角礫と亜角礫がある。石材は、灰色系の安山岩であるが灰色のものより少し黒っぽいものが多い。白い斑晶は少し認められる。①②は、小さい原石で葉理面からの割れ目が多い。良い石材を選択する傾向はないが、小さい原石は運べても大きなものは運び難いことは考えられる。原産地の原石分割剥片の利用は、運び易いように小さくしていることが考えられます。石刃石核があることから、旧石器時代の安山岩の流通を解明する手がかりになりますので、原産地の究明が望まれます。



①4.5×5.0×2.8 63 g



②5.6×6.0×3.0 116 g



③6.1×7.6×2.5 93 g



④8.3×3.4×2.7 114 g 縮尺率 80%



⑤7.0×9.7×3.3 118 g 縮尺率 70%





⑥4.4×8.1×1.9 5.0 g 縮尺率 90%



⑦6.0×6.2×2.0 87 g



⑧5.5×6.1×1.4 45 g



⑨4.8×6.0×0.8 24 g



三年山・茶園原遺跡の槍先形尖頭器の製作方法

槍先形尖頭器の製作方法は、大きく分けて 3 種類ある。①A タイプは、粗割りを全体に行い大まかな祖型を作る。②B タイプは、剥離角が緩やかな粗面調整で先頭部の加工を先に基部整形を後にする。③C タイプは、扁平な原石を粗割りして作るタイプで祖型はかなり大きいのが特徴である。

A タイプ



三年山
11.4 c m



茶園原
14.7 c m

多久市下鶴遺跡には、左右対称な A タイプのものが多く見られる。

B タイプ



茶園原
12.0 c m

C タイプ



茶園原
18.5 c m

室津半島大星山
丸山周辺の安山岩
冠遺跡・三年山と茶園原遺跡
宇部洪積台地遺跡の安山岩と
冠高原・多久安山岩の比較
令和 4 年（2022）9 月 15 日発行
防府考古学研究会